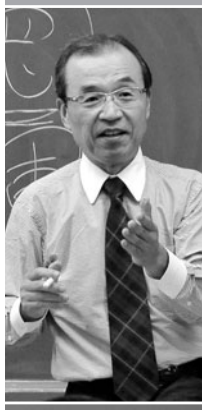
学校と企業・経営者の交流活動 2008レポート



今年度、学校と企業・経営者の交流活動推進委員会（以下、推進委）は委員長に山中信義氏が就任し、新たな取り組みも始めている。推進委は、「生徒に対しては職業観育成への貢献と将来を考えるきっかけづくり、先生に対しては社会の変化を伝え教育現場に生かしてもらうこと、学校に対しては学校経営改革の面での支援」（山中委員長、墨田教育フォーラムにて）を目的に活動を行っている。さらに、学校を支える保護者や地域の人々を含めた「教育現場にエールを送りたい」（同）との立場から、経営者としてどういった貢献ができるかを考え、行動している。その最新のレポートを特集で紹介する。

INDEX

墨田教育フォーラム …… P.3
埼玉県立草加南高校 …… P.5
江戸川区立瑞江第三中学校 …… P.6
東京都立淵江高校 …… P.8
山中信義委員長インタビュー …… P.9

REPORT ❶ 墨田教育フォーラム

主催：墨田区立中学校校長会
墨田区立中学校PTA連合会

経営者が生徒、教員、保護者と語る「教育フォーラム」を墨田区が招請

世界の動きについて理解を深め学ぶことの意味を考えさせたい

経済同友会は昨年から2度にわたり、中学校の生徒、教員、保護者を招いて、講演とグループ単位のディスカッションで構成する「教育フォーラム」を開催した。

今年度に入り、墨田区よりこの教育フォーラムを「区内で実施してほしい」という要請があった。今年3月に開かれた同友会主催の教育フォーラムには、墨田区立の中学が6校（両国、本所、寺島、墨田、錦糸、鐘淵）参加しており、フォーラムの意義や内容を高く評価した上での招請であった。

そして9月6日の土曜日、曳舟文化センターで「墨田教育フォーラム」が開催された。同フォーラムは、①社会や時代の流れ、世界の動きについての理解を深め、これからの時代に必要な学習観を身につけるとともに、学校で学習や生活することの意味を考え、学ぶ意欲を養う、②働くことの目的や意義を理解し、夢や希望を持ち、将来設計を考える契機とする、を主な目的とし、上記のプログラム内容で行われた。区立中学12校から、生徒48名、教員38名、保護者32名が参加した。同友会からは、推進委の正副委員長、運営委員を務める10氏が参加した。

プログラム

第1部
①開会式　主催者挨拶　長谷川ミチル氏（墨田区立中学校校長会 会長）
　　来賓代表挨拶　久保孝之氏（墨田区教育委員会 教育長）
②基調講演「これからの社会で活躍するために必要なこと」 山中信義氏（ベインキャピタル・ジャパン 副会長）

第2部　経営者とのグループディスカッション
○生徒グループ　「勉強は何のため？働くってどういうこと？」
○校長・副校長および保護者グループ　「これからの企業で求められる人材、受験と就職について」
○教員グループ　「これからの社会で求められる力と教育のあり方」

第3部　参加者と経営者との交流会

生徒、教員、保護者ごとに各テーマで経営者と語り合った

第1部では、山中信義氏が「これからの社会で活躍するために必要なこと」と題して、参加者全体に向けて基調講演を行った。山中氏は、「仕事でも勉強でも、基本を何度も繰り返し身につけることが大前提だ」とした上で、これからの人生で大切になる6項目（①ポジティブ思考をする、②高い目標を持つ、③個性を大切にする、④まず行動を起こす、⑤人生のPDCサイクルを回す、⑥成功するまであきらめない）を訴えた。

第2部は、10名前後のグループに分かれてディスカッションを

（写真左から）生徒グループの講師を担当した永田順子氏、校長・副校長および保護者グループの講師を担当した小林惠智氏、教員グループの講師を担当した建部信也氏。

行った。生徒グループは「勉強は何のため？働くってどういうこと？」、校長・副校長および保護者グループは「これからの企業で求められる人材、受験と就職について」、教員グループは「これからの社会で求められる力と教育のあり方」をテーマにして、講師の経営者を中心に真剣に語り合った。各講師には参加者に対して行われた事前アンケートの回答が用意されており、スムーズに討論が進行した。特に、「将来、何になりたいか」を回答していた生徒にとっては、講師からアドバイスがもらえるなど大いに発奮材料となるディスカッションになったようだ。また、教員や保護者にとっても、日常的には行うことのないような議論の機会となり、新鮮な刺激を受けていたようだ。

事後のアンケートに記された感想を見ると、保護者からの評価が特に高かったようで、「日本が直面している問題についてよく理解できた。今後、家族で話す機会を持ちたい」、「学歴が重要なのではないという話は、たいへん役に立った。高校生の息子にも今日聞いたことを話そうと思う」などの感想が寄せられていた。教員からは、「現場で行っている教育が期待されているものからかけ離れているのかもしれない」、「学校経営に企業経営の考え方を生かすという指摘は大いに参考になった」などの感想のほか、「せっかくの機会で、もっと時間がほしかった」という声も多かった。

茂木賢三郎氏

前原金一氏

「墨田教育フォーラム」講師

※所属・役職は開催当時

山中信義氏　（ベインキャピタル・ジャパン 副会長）
小林惠智氏　（ヒューマンロジック研究所 取締役会長）
永田順子氏　（日本航空インターナショナル 執行役員）
前原金一氏　（昭和女子大学 副理事長）
茂木賢三郎氏（キッコーマン 取締役副会長）
吉村幸雄氏　（日興シティホールディングス ガバメント・アフェアーズ担当執行役員）
近藤　章氏　（AIGイースト・アジア・ホールディングス・マネジメント 副会長）
建部信也氏　（スリー・アール 取締役会長）
廣瀬駒雄氏　（ジョイント・コーポレーション 取締役）
藤田　實氏　（オグルヴィ・アンド・メイザー・アジアパシフィック 取締役リージョナルディレクター）

FOCUS　教育委員会の教員研修への講師派遣依頼も多数

経済同友会が出張授業の実施に組織全体として取り組み始めたのは2001年度からである。墨田区立の中学校との交流は、それ以前から盛んに行われていた。墨田区は最も関係の深い地域のひとつで、2005年度からは、墨田区立中学校PTA連合会主催の会合に講師を派遣し、保護者を対象とした講演会を行っている。

このように出張授業が広く認知、評価されていく中で学校単位を超えたところへ交流活動が広がっていくという事例は、ほかの地域にもある。中でも、教育委員会が実施する各種の研修会への講師派遣依頼は多い。昨年度も、中央区、港区、北区、足立区、三鷹市、東大和市、国立市、西東京市、川崎市、兵庫県などで実施された。ほかに、杉並区や横浜市では、年に複数回、種類の異なる研修会で講師を務めている。

横浜市の場合、新任校長研修会で全体講演とグループディスカッションが行われ、計9名の講師が出向いたほか、よこはま学校経営塾（副校長対象）、中学校校長会夏季研修会へも講師を派遣している。

各種の教員研修では、特に、日本と世界の変化、グローバルな視点を教員に伝えていくことや、学校に企業経営の視点を取り入れるという問題提起、などが求められている。

昨年11月27日に実施された、杉並区教育委員会の副校長・主幹研修会の模様。役職ごとにグループに分かれてディスカッションを行った。講師は、小林惠智氏、斎藤博明氏、山中信義氏。

REPORT ❷ 埼玉県立草加南高校

少人数授業の要望を受けて 12名の講師を派遣

大学への意識付け、勤労観育成、教職員の意識改革がねらい

11月10日、埼玉県立草加南高校で1年生全員（240名）を対象に出張授業が行われた。同校での出張授業は昨年に続き2回目。昨年は6名の講師派遣だったが、学校側から少人数形式の希望があったため、今年は12名の派遣となった。大規模校や複数学年対象の出張授業で一時に10名以上の講師が出向くことは年に数回あるが、高校での少人数グループの出張授業は初めてのこと。

校長の伊古田陽子氏は出張授業に期待することとして、①大学進学、専門性の高い学習に対する意欲を上げる、②望ましい勤労観の醸成、③教職員の意識改革、モチベーションの向上、の3点を挙げている。また、進路指導主事の根岸良行氏は、「昨年、出張授業を受けた生徒に先頃アンケートを行ったところ、1年前に聞いた内容をよく覚えていて、半数の生徒は印象に残った講師の言葉を書いていた。普段は聞けない内容の話が生徒たちには新鮮で、大いに刺激になったようだ」と語った。

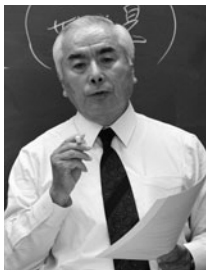
今年の出張授業でも、生徒の姿勢は「いつもの授業では見られないような真剣なもの」（根岸氏）であった。さらに、1グループ20名前後で講師と生徒の距離感も狭まり、ほとんどのグループで生徒から活発な質問が出ていた。

同校では授業終了後、講師全員と1学年担当の先生方とで意見交換を行う時間を設けた。学校側にすれば、同友会の講師という外部の目を通して学校や生徒に対する評価を聞くことのできる貴重な機会であり、講師陣の発言に真摯に耳を傾けていた。多数の講師派遣に対し、生徒も先生もそれに見合う労力と熱意を込めて、出張授業の機会を活用しようとしているようだ。

参加講師

※所属・役職は開催当時

岩下　正氏　（ローン・スター・ジャパン・アクイジッションズ 会長）
遠藤勝裕氏　（日本証券代行 取締役相談役）
高木明郎氏　（国際短期大学 学長）
谷本　肇氏　（リアルコム 代表取締役）
野口忠彦氏　（大林組 専務取締役）
林　明夫氏　（開倫塾 取締役社長）
林　達夫氏　（アークデザイン 取締役社長）
平田　正氏　（協和発酵キリン 名誉相談役）
廣瀬駒雄氏　（ディレクトフォース シニアフェロー）
山崎伸治氏　（シニアコミュニケーション 取締役社長）
山中信義氏　（ベインキャピタル・ジャパン 副会長）
鰐渕美恵子氏（銀座テーラーグループ 取締役社長）



前年度まで推進委委員長を務めていた、遠藤勝裕氏（写真左上）。推進委では運営委員を務める、林明夫氏（写真上段左）と廣瀬駒雄氏（写真上段右）。12名の講師陣の中では最も若い、谷本肇氏（写真下）。

職業体験直前の2年生、進路決定直前の3年生 それぞれのねらいを持って

学校内の連携を強化し、年間計画の中に位置付けた

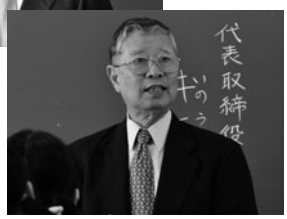
江戸川区立瑞江第三中学との交流が始まったのは2006年度で、3年生対象の出張授業からだった。その評判がとてもよく、2007年度には、6月に教員・保護者向けの講習会、11月に3年生対象の授業、2月に1年生対象の授業が行われ、交流が拡大している。

同校では、教務部と進路指導部が連携し、学校全体の年間計画における出張授業の位置づけを明確にした上で、貴重な機会をより効果的に生かすよう企画を進めてきた。その結果、「2008年度は、2年生を対象に職業体験前の時機に、3年生対象に進路希望を学校に提出させる時機に、出張授業を行いたい」とのプランを昨年度中にまとめていた。学校側の大きなねらいは、職場（社会）に出ていった時に大切なものは何か、進路決定に際し自分の夢は何なのか、勉強するのは何のためなのかを考えさせたいという点だ。そして11月14日、午前中に3年生3クラス、午後に2年生4クラスで出張授業が行われ、計7名の講師が出向いた。

出張授業の効果について校長の飯沼昇氏は、「学校が指導していること（あいさつをする、時間を守るといった基本的な事柄など）と、経営者の皆さんが話してくださること（社会に出ても基本が大事など）が融合して、学校の雰囲気がだいぶよくなった」と語っている。さらに、「事後のやりとりの中で、講師の皆さんが生徒の感想文を真剣に読んでくださっていることを知り、とても驚いた」（主幹の石田文雄氏）などと、講師の取り組みの姿勢に対しても敬意を表していた。

学校側は交流活動を今後も継続していきたい考えで、次年度以降に向けて出張授業の新たな形態の検討を始めている。

3年生の授業を担当した、鰐渕美惠子氏（写真左）と野口忠彦氏（写真右）。両氏とも今年度から推進委のメンバーに加わった“若手講師”。



2年生の授業を担当した林達夫氏（ページ右上の写真）と岩下正氏（写真上）、井上明義氏（写真右）。

参加講師

※所属・役職は開催当時

[3年生担当]

野口忠彦氏　（大林組 専務取締役）
平田　正氏　（協和発酵キリン 名誉相談役）
鰐渕美惠子氏（銀座テーラーグループ 取締役社長）

[2年生担当]

井上明義氏　（三友システムアプレイザル 代表取締役）
岩下　正氏　（ローン・スター・ジャパン・アクイジッションズ 会長）
林　達夫氏　（アークデザイン 取締役社長）
廣瀬駒雄氏　（ディレクトフォース シニアフェロー）

FOCUS 学校の実情、要望を聞く「出張授業オリエンテーション」

推進委は毎年、交流実績のある学校の先生方を招き「出張授業オリエンテーション」を実施している。今年は10月14日に開かれ、今回の特集で紹介した江戸川区立瑞江第三中学校と、埼玉県立草加南高校から4氏が出席した。初めに両校から学校の紹介や出張授業に際しての要望が出され、その後、意見交換が行われた。

学校側からは、例えば「今の生徒は驚くほど社会のことを知らない」など、率直な状況の説明があり、生徒に話す時の要望も具体的で、実践的に役立つスピーチだった。

推進委の委員にとっては、学校現場の生の声を聞く良い機会であり、モンスターペアレンツや学校経営に対する考え方などについて質問が相次ぎ、問題意識を共有化する有意な議論が展開された。

出張授業オリエンテーションは2001年度から行われていて、公立高校が出席するのは今回が初めて。

江戸川区立瑞江第三中学校

校長
飯沼 昇氏

主幹
石田文雄氏

埼玉県立草加南高校

校長
伊古田陽子氏

進路指導主事
根岸良行氏

FOCUS 多様な要請に応え、出張授業の形態も年々多様に

経済同友会が学校との交流活動を始めて、今年で10年目となる。この10年間、学校側も同友会も、より実効的な交流のあり方を模索してきた。多くの学校は、自校の実情に合わせた授業の内容や形態を提案し、その要請に沿う形で交流活動も多様化してきたと言える。

その中で、遠藤勝裕前委員長（2005～2007年度在任）は、特色ある出張授業として下記のような3つの形態を定着させていった。背景には、学校側と推進委・事務局の意思疎通が円滑に行われ、学校が希望を率直に伝えることができていることもあろう。

そして今年度は、体験型出張授業をスタートさせる。第1回として、北城恪太郎前代表幹事とIBMでのプログラマー体験を組み合わせるという試みが、来年1月に予定されている。

ほかにも、岐阜県内の複数の中学校とは、修学旅行で上京した際の宿舎で出張授業を実施した事例など、ユニークな取り組みも増えている。東京近郊以外の地域からの依頼も最近は多く、昨年度の出張授業だけでも、松本、豊橋、奈良、新島などへ講師が出向いている。

特色ある出張授業

1. 少人数制授業

少人数制授業は学校側の準備等の負担も大きいが、人気は高い（写真は昨年11月29日の世田谷区立梅丘中学校での少人数制出張授業風景。講師は林明夫氏）。

2. 双方向性の授業

あらかじめテーマを絞り込み、生徒に事前にレポートを提出してもらうなど、出張授業が講師からの一方通行にならないよう取り組んでいる学校もある。

3.継続性のある授業

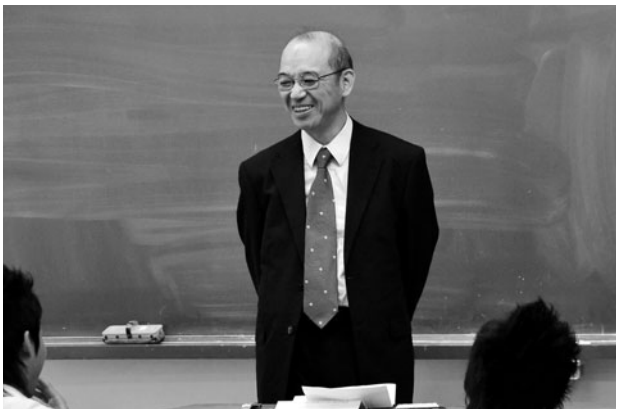
同じ生徒に対し、同じ講師が年間に複数回の出張授業を行い、“1回きり”ではない関わりを持っていこうという取り組みも始まっている。昨年度は杉並区立大宮中学校（2年生35名対象、講師4名で6月と12月に実施）などで行われた。

保護者との対話

保護者との対話は交流活動の課題のひとつ。保護者を交えた会合への講師依頼も徐々に増え、昨年度は10件に上った（写真は昨年12月8日の都立高校第6地区校長・副校長・保護者向け合同研修会。講師は髙坂節三氏）。

REPORT ❹ 都立淵江高校

重要度増す高校の進路指導に出張授業を活用



吉村幸雄氏は、都立高校での出張授業は2回目。

野球部向け授業をきっかけに今年は１年生全員に広がる

9月24日、都立淵江高校で1年生対象の出張授業が行われ、5名の講師が同校を訪れた。

淵江高校との交流は、昨年から始まった。同校の野球部から部員向けの講演依頼があり、自身も野球部だったという波多野敬雄氏（学習院院長）が快諾し、「部活動（野球）を通じて得られること」と題して“少人数授業”が行われた。

それがきっかけとなり、今年は、同校で実施している進路講演会の講師を務めるという形で出張授業が実現した。進路選択に関する意識付け、働くことについて考えさせていくことは学校側にとっては大きな課題であり、1年生段階から生徒に対する働きかけは欠かせないという。ほぼ全員が高校へ進学する中学段階とはまた違った意味で、高校の進路指導は大きな重みを持っている。講師も真剣に「働くとは？」「なぜ勉強するのか」を語っていた。

講師のひとり、吉村幸雄氏によると、「中学生の場合、緊張しているせいか、概して静かに聞いている。少し騒がしいかなと思うこともあるが、高校生の方が質問がよく出たり、元気なリアクションがあったり、手応えがある」という。特に都立高校は「奉仕活動」が義務化されていることもあり、社会の動きを伝える経営者の出張授業が担う期待や役割は大きいと考えている。

参加講師

※所属・役職は開催当時

木下利彦氏　（ミック 取締役会長）
中村禎良氏　（セントラル硝子 取締役 取締役会議長）
平田　正氏　（協和発酵工業 名誉相談役）
山中祥弘氏　（ハリウッド大学院大学 学長）
吉村幸雄氏　（日興シティホールディングス ガバメント・アフェアーズ担当執行役員）

木下利彦氏

平田 正氏

FOCUS　2007年度以降、公立高校へのアプローチを強化

出張授業は中学校を主な対象としてきたが、公立高校への交流活動拡大は推進委の課題であった。都立高校での出張授業の実績は、2005年度が4件、2006年度は2件であった。しかし、2007年度は都立高校で11件、高校全体で32件と増加した。経済同友会も参加する都教委のプラットホーム「東京都地域教育推進ネットワーク」を通した依頼が多く、交流活動には一定の認知があると受け止めている。

昨年12月14日、都立松原高校での出張授業。講師を務めた船津康次氏（写真上）と日高信彦氏（写真下）。

INTERVIEW　山中信義委員長

いちばん伝えたいのは“答えはひとつではない”ということ

1947年愛知県出身。76年De Paul Universityにてビジネス・マネージメントの学位を取得後、90年INSEAD Executive Course終了。オムロン、ゼネラル・エレクトリック（GE）を経て、95年USSCオートスーチャー・ジャパン代表取締役社長兼最高経営責任者、98年日立GEライティング代表取締役社長兼最高経営責任者、2000年Emerson Electric米国本社役員、日本エマソン代表取締役社長、Emerson Electric Asia Pacific IT担当副社長、2006年日本コンラックス代表取締役会長、2008年ベインキャピタル・ジャパン副会長に就任。
2000年経済同友会入会。2002年より幹事。2002～2003年度創発の会副座長、2003年度企業競争力委員会副委員長、教育の将来ビジョンを考える委員会副委員長、2004年度対内直接投資拡大プロジェクト・チーム委員長、2005～2006年度対内直接投資推進委員会委員長、2005年度学校と企業・経営者の交流活動推進委員会副委員長、2006年度学校と企業・経営者の交流活動推進委員会運営委員、2007年度学校と企業・経営者の交流活動推進委員会副委員長、2008年度学校と企業・経営者の交流活動推進委員会委員長を務める。

夢を子どもに語らない親や大人の側に問題があるのでは

私は企業経営に長い間携わってきましたが、経営とはつまるところ、「人」なのだと痛切に思います。一方で、新入社員などを見ていても個性が感じられず、今の教育で大丈夫なのか、何か自分に支援できることはないかとも思っていました。そうした中で4、5年前になりますが、この委員会を手伝わないかと誘われました。

最初は「今の子どもに問題があるのだろう」と漠然と考えていましたが、実際に生徒たちに接していくうちに、夢を語りかけない親や大人、子どもの個性を伸ばせないでいる学校の仕組み、つまり大人の側に責任があるように思い始めました。今は、大人としての反省の意味を込めて交流活動に参画しているという意識です。

教育の現場に出向き、私が一番伝えたいのは、「答えはひとつではない」ということです。社会は明らかに複雑になり、多様化し、いろいろな生き方でいろいろな人たちが活躍できる世の中になりました。生徒には「自分が自分として最も味が出せる生き方をしてほしい」と訴えています。そして先生にも、「子どもたちの個性を大切にしてください」とお願いしています。

違った意見、違った考え方を持つ人間が融合して新しいアイデアや技術やモノが生み出されていくのが、今のグローバル社会です。そこで求められているのは、自分の考え方を体系立てて分析でき、発表でき、異なる意見を持つ人ともきちんと意見交換できる人物です。ところが日本の教育は、依然として「正しい答えはひとつ」という既成概念に縛られたままです。この呪縛を何としても解いていきたいと思うのです。

目標は質の向上と対象の拡大 新たに体験型授業も行う

推進委は、今年度も「質の向上と対象の拡大」を大きな目標に掲げ、活動を行っています。

出張授業の質の向上については3つのことを考えています。第一は、われわれ自身のスキルアップが必要だということで、研修会などいろいろな勉強の機会を設けていこうと思っています。第二に、一定期間を取りながら同じ学校に

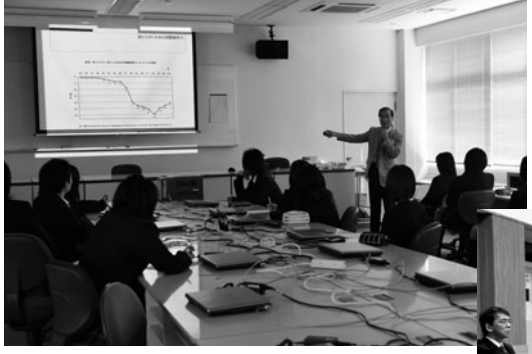
「交流活動」実施件数（派遣講師数）

種別	授業				講演会・懇談会			その他	合計
対象	小学生	中学生	高校生	小計	教員	保護者	小計		
1999年度		1 (2)	4 (4)	5 (6)	12 (12)	1 (1)	13 (13)	0 (0)	18 (19)
2000年度		4 (14)	6 (6)	10 (20)	17 (17)	2 (2)	19 (19)	0 (0)	29 (39)
2001年度		21 (70)	16 (20)	37 (90)	37 (37)	17 (17)	54 (54)	0 (0)	91 (144)
2002年度		15 (56)	10 (10)	25 (66)	28 (28)	7 (7)	35 (35)	1 (1)	61 (102)
2003年度		22 (67)	13 (20)	35 (87)	34 (35)	13 (13)	47 (48)	2 (2)	84 (137)
2004年度		14 (77)	20 (40)	34 (117)	36 (47)	6 (6)	42 (53)	2 (7)	78 (177)
2005年度		44 (146)	32 (54)	76 (200)	47 (55)	8 (8)	55 (63)	7 (14)	138 (277)
2006年度	1 (1)	50 (143)	29 (41)	80 (185)	53 (59)	7 (7)	60 (66)	6 (6)	146 (257)
2007年度	3 (4)	45 (153)	32 (49)	80 (206)	47 (64)	6 (6)	53 (70)	9 (9)	142 (285)
合計	4 (5)	216 (728)	162 (244)	382 (977)	311 (354)	67 (67)	378 (421)	27 (39)	787 (1,437)

複数回訪問するようにしていきたいと考えています。出張授業の効果を検証することで、コンタクトの密度も濃くなりますし、質も向上するのではないでしょうか。第三は、体験型授業という新しい試みです。講師が語るだけでなく、その内容を確かめられるような体験を組み合わせて、生徒の中に残せるものを少しでも増やしたいと思っています。

対象の拡大については、小学校6年生へのアプローチを強化していく方針です。小学校6年生は、最高学年としてそれなりの意識を持ち、中学進学を前に自分の将来に対する感度も高いのです。その時期に社会や国のことを語りかけていく意味は大きいはずだと考えました。

また、保護者の方々、先生方にも今まで以上に語りかけていこうと思っています。特に保護者に対しては、テクニカルな部分や結果ばかりに関心を持つ人が多いのですが、実社会ではやる気や情熱や気概が必要なのだということをよく説明し、マインドを変えてもらわないといけないでしょう。



（写真上）11月10日、埼玉県立草加南高校での山中氏の授業風景。（写真右）9月6日、墨田教育フォーラムのグループディスカッション。山中氏は、校長・副校長および保護者グループを担当した。この日、山中氏がディスカッション参加者に配布したレジュメのタイトルは、「先生方へのお願い 世界から尊敬を受け、活躍できる人材へ」であった。

われわれの話が、生徒の人生のどこかで役に立てれば

われわれは、経営者の立場から思っていることをストレートに語らせてもらうことしかできないわけですが、そのことが、子どもたちのこれからの人生のどこかで役に立ってくれること、そして、先生方にとっても考えるよいきっかけになることを切に願っています。われわれの活動は非常に息の長いもので、すぐには結果が出ません。いろいろなバックグラウンドを持つ多くの会員の方々にご参加いただきたいと思っています。私自身は、この委員会は同友会で最も楽しい委員会のひとつだと感じています。

副委員長

※所属・役職は11月19日現在

大塚良彦氏　（大塚産業クリエイツ 取締役社長）
尾原蓉子氏　（IFI［（財）ファッション産業人材育成機構］IFIビジネス・スクール 学長）
小林惠智氏　（ヒューマンロジック研究所 取締役会長）
永田順子氏　（日本航空インターナショナル 執行役員）
中村紀子氏　（ポピンズコーポレーション 代表取締役）
前原金一氏　（昭和女子大学 副理事長）
茂木賢三郎氏（キッコーマン 取締役副会長）
吉村幸雄氏　（日興シティホールディングス ガバメント・アフェアーズ 担当執行役員）

FOCUS　講師のスキルアップのための取り組みも

推進委は、以前から講師のスキルアップを重要な課題として認識し、効果的で魅力的な授業の実践のためのノウハウ、生徒に受け入れてもらいやすい話し方などを勉強してきた。その中心が、2004年度から行っている「話しことば実践講座」である。推進委のアドバイザーのひとり、NHK放送研修センター日本語センターの加藤昌男氏には、毎年推進委の委員向けの講習を依頼。2006年度からは講座開催の回数も増やし、多様な分野の方にも講師を務めていただいている。また、出張授業オリエンテーションなどの機会を通じて学校の先生方からも、生徒が関心を持つテーマや授業の進め方のポイントなどのアドバイスをもらっている。

9月4日の会合では、ILEC言語教育文化研究所常任理事の高橋俊三氏を招き、「講師の話力を磨く～子どもの知と心を拓く話し方・聞き方～」を学んだ。